

梅娘と「満州」文壇

張 欣

一. 梅娘の少女時代

1. 「母の笑顔を見たことがない」

「満州」(中国東北)⁽¹⁾出身の女性作家と言えば、まず思いつくのは蕭紅(1911—1942)だろう。1934年蕭軍(1907—1988)と共に関内(山海関以南の地)に逃亡した蕭紅はその後魯迅の指導も受けて、いち早く世に知られた。これまでの蕭紅の文学「正史」における高い位置づけは「抗日文学」という大義名分に負うところが多い。しかし、近年「文学史の書き直し」が盛んになり、蕭紅研究にもフェミニズム思想や歴史観の再検討など新しい視角が導入された⁽²⁾。この蕭紅と並んで当時「満州文学運動の推進に対し否認すべからざる功績をあげた女性作家」⁽³⁾と称されたのが梅娘(本名孫加瑞, スン・チアルイ, そんかずい, 1921—)である。

19世紀末多くの漢民族がより広い土地、よりよい生活を求め、関内から豊かな「満州」平原へと移民した。梅娘の父親孫志遠もこうした流れに乗って、貧農である父に背負われて遥か山東省の招遠県から長春にやって来たのであった。孫志遠は12歳の時イギリス人経営の「ト内門」石鹼会社の使用人になり、英語を身につけた。それからロシア人経営の「道勝」銀行、日本人経営の「正金」銀行の外回りの店員になり、ロシア語と日本語も習った⁽⁴⁾。つまり、孫志遠は先祖代代が従事してきた農業を捨て、商業を営むようになったのである。

「棄農経商」の結果、孫志遠は長春でも著名な実業家となった。孫志遠のこのようなやり手ぶりや特別の商才は当時、長春における最高官位である「鎮守使」の注目するところとなった。ロシア、イギリス、日本など各国の政治的経済的勢力が複雑に絡み合っている長春で影響力を行使するために、「鎮守使」には孫志遠が必要だった。「鎮守使」は娘の反対に耳を貸さず、孫志遠を入婿にした。結婚は孫志遠にとっては野望実現の手助けにはなったが、一方で個人生活における悲劇の始まりともなった。性格も趣味も夫人とは合わない孫志遠には、やがて愛人ができた。

孫志遠は中東鉄道で貨物運輸の支配人をしていて、仕事の関係でよくウラジオストックに行き、そこで後の梅娘の生母に出会い、二人は二年ほど同棲していた。1920年12月22日（旧暦の1920年11月13日）、梅娘がこのウラジオストックで生まれた⁽⁵⁾。奉海（奉天—海龍）、海梅（海龍—梅河口）鉄道を敷設するため、孫志遠は中東鉄道での仕事を辞め、梅娘とその生母とを長春の家に連れて戻った。孫志遠は梅娘と生母を四平街に住ませようと考えていたが、彼が仕事に出かけた間に、孫夫人は「卑劣」な手段で梅娘の生母を無理矢理に追い出してしまった（梅娘の生母は後に自殺したという噂がある）。生母の死後、梅娘は父親の正妻である継母からは少しも愛されることがなかった。

私は幼い時に母親を失い、継母の手によって育てられた。最初、母親が実母でないとは知らず、私は小さな純粋な女の子の気持ちを抱いて母に近づいたが、母はいつも私のことをかまってくれない。私と話をする時には顔を強張らせ、怒った時にはすぐに罵る。私は母の笑顔を見たことがない⁽⁶⁾。

早くから生母を失い、継母の「笑顔を見たことがない」という子供時代の体験は梅娘に大きな影を投げかけた。心の憂鬱は後まで続き、弱者への同情、女性への関心、大家族制への懐疑的な思考など梅娘文学のモチーフを形づくってゆくことになる。ちなみに、「梅娘（メイニアン）」という筆名は「没娘（メイ

ニアン)」(母がいない)と発音が同じである。

母親の愛情に恵まれない梅娘はその代わりに父親の愛情をたっぷり味わった。愛人を失った孫志遠はすべての愛を梅娘に注ぎ、梅娘を掌中の珠のように可愛がって、彼女の勉強のために優れた環境を用意した。梅娘は4歳から勉強を始め、清朝遺民の秀才に経書や習字を習い、ロシア人の老婦人に英語を習い、ある老先生に数学を習ったのである。暇な時には孫志遠はよく洋装した梅娘を連れ、長春の郊外で馬を馳らせた。馬車はフランスから買ってきたもので、当時の長春ではまだ珍しいものだった。孫志遠はよく手綱を梅娘に渡し、馬車を彼女に任せた。女の子が馬車に乗るなど当時長春の人々にとっては考えられないことだった。「多分、彼は意識的にそうしたのだろう。彼は自分の愛娘が男のように独立し、自ら歩むべき方向をつかむことを望んでいたのだろう」と、晩年の梅娘は回想している⁽⁷⁾。

「満州」という梅娘の原点を考えると、長春が相当な重みを占めていることがわかる。長春について、晩年の梅娘は次のように書いている。

私は長春の生まれではないが、物心がついた時から心に刻まれているのはすべて長春でのことである。(中略) 町ではあらゆる商売が繁昌していたと言えよう。質屋、呉服屋、米屋、金物雑貨屋などなどが立ち並んでいて、とてもにぎやかだった。(中略)

生涯忘れられないのは隣近所のことである。今は南向きに立っているとしよう。左はヴァチカンより派遣されたフランス国籍の神父が主宰するカトリック教の仁慈堂であり、我が家の庭とは板壁を隔てるだけだった。右はロシア「道勝」銀行の長春支店であり、緑のペンキを塗った丸い鉄製の屋根が高く聳え立っている。道の向こう側はイギリスの「ト内門」石鹸会社であり、正面は精巧な中国レンガ製の構えである。「勝家」ミシン会社の明るい大きなショーウィンドーには実物よりずっと大きいミシンのサンプルが置かれている。「ト内門」と「勝家」の二大会社の間に挟まれてい

るのは土地者の馬の大手販売業者で、黒いペンキの大門に門神様秦琼の彩色肖像画が貼り付けられている。大門の右側には粘土製の福の神の像があり、像の前の鉄の香炉から煙が終日うずをまいて立ち昇っている。

(中略)

こうして、私の子供時代の生活には神的、人的、東洋的、西洋的な色彩が同時に入り乱れているのだった⁽⁸⁾。

子供時代の体験は、作家梅娘の心の中での原風景となったのであろう。

2、文学少女

梅娘が生まれた時の「満州」はまだ「東北王」と称される奉系軍閥張作霖の支配下に置かれていた。「奉系当局の東北に対する統治および日本帝国主義との関係、さらに蒋介石の南京国民政府との関係は、“九・一八”事変前の東北の歴史的背景の重要な内容を構成して」おり⁽⁹⁾、日本の「満蒙における特別な地位は日露戦争により得たものではあるが、多くの既得権益は張作霖の時代より得たのであった」⁽¹⁰⁾。1928年6月3日張作霖が爆殺された後、その地位を世襲した息子の張学良は軍閥として生きる道を捨て、国民政府の統治下に入った。中華民国の「青天白日旗」が「満州」の大地に翻り始めたのは1928年12月29日からのことである。

「満州文学」は「五四」以来の中国新文学から大きな影響を受けており、「満系作家」もほとんどはその影響下に育ったのである。例えば、瀋陽の「奉系」軍人家庭に生まれ、後に北京の「新進作家」として有名になった袁犀(1919—1979)⁽¹¹⁾の場合、五、六歳の時から私塾に入って啓蒙教育を受け、奉天省立第三小学校で勉強している時も家庭教師について書道や古文を学び、梅娘と同じように最初は伝統教育を受けた。「満州事変」(「九・一八事変」)後、袁犀は高等小学校を中退、独学で奉天省立第二初級中学校に合格し、中学校で初めて「白話文」に出合った。魯迅、周作人の作品を愛読するようになり、習

作で郁達夫を一所懸命模倣した。そして1933年瀋陽『民声晩報』に最初の短編「面包先生」を投稿し掲載された⁽¹²⁾。後に文選派の作家として有名になった遼寧省出身の梁山丁（1914—）の場合、開原中学校時代、燕京大学卒業生の教員辺燮清から魯迅の『呐喊』、『彷徨』、蔣光赤の『鴨緑江上』、丁玲の『水』などを借りて、新文学の啓蒙教育を受けたのである⁽¹³⁾。

初等小学校四年および高等小学校二年合計六年の課程を三年間で勉強し終え、1930年10歳の梅娘は優秀な成績で高等小学校を卒業した。中学校進学に際し、英語教育で有名なミッション・スクール、ロシア語を学ぶハルピンの女子中学校および吉林市にある省立女子中学校といった三つの選択肢があった。父親は北伐戦を体験した友人たちに薦められ、三番目の選択肢を選んだ。この学校は「校長は北伐軍とともに来た革命の志士であり、先生たちは大体北京か上海の大学を卒業した人であり、教科書は中華書局より出版された最新のテキストを使っていた」からである⁽¹⁴⁾。秋に編入試験を受け、国文、英文、算数はすべて合格。とくに梅娘が書いた「論振興女権の好处」（「女権振興の利点を論じる」）という入試の作文が教師たちを驚かせている。それは父親の指導のもと、『秋瑾伝』や梁啓超の『飲氷室文集』を読んで、その影響を受けた結果である。

家庭のもやもやとした雰囲気から離れ、中学校で梅娘は楽しい毎日を過していた。新入生の歓迎会で梅娘はイブセンの『ノラ』に出演し、それをきっかけにイブセン、バイロン、ロマン・ロラン、ゴーリキーなど西洋作家の作品を読み始めた。中学校で最も梅娘が敬服した教員は北京大学卒業の国文科の王春沐である。

彼はわれわれに白話文で作文や日記を書くことを指導した。私はすでに思いのままに使えるようになっていた之乎者也など虚詞の古臭い調子を素早く捨てて、呢呀啦嗎を使い始めた。口語の語順で自分の思想や体験を記録するやいなや、ペンは春の潮のよう、押し寄せる波のしぶきは尽きるこ

とがなかった。王先生は私に新文学の入門授業をしてくれたのだ⁽¹⁵⁾。

梅娘はそれから五・四以来の新文学に触れ始め、聞一多、許地山、氷心らの作家の作品を読み漁った。王春沐は梅娘の作文から文学的「天才」を発見し、氷心の『寄小説者』⁽¹⁶⁾を梅娘に与え、作家になるようにと梅娘を励ました。

1931年、梅娘が11歳の時、「満州事変」(「九・一八事変」)が起きた。事変後「日本帝国主義の侵略者は支配の初期において、東北人民の民族意識および抗日闘争を消滅させるため、すべての学校を停止するように命じ、各級、各種の学校を閉鎖した」⁽¹⁷⁾。梅娘は吉林から長春に戻り、読書の日日を送った。林紓⁽¹⁸⁾が翻訳した外国小説のシリーズおよび『紅樓夢』、『西廂記』などはこの時期に読んだのである。その間、梅娘の父は「満州国」中央銀行副総裁の職を拒んでいる。

翌年、継母の転地療養のため、梅娘ら兄弟は大連、青島、済南に同行した。東北平野で生活していた子供たちにとって大連、青島では学校に行く必要もなく、しかも家庭教師もおらず浜辺での遊びはこれ以上ない楽しみだった。色とりどりの小さい生き物、とくに横歩きの小さい蟹が梅娘の心に深い印象を与えた。後に作家になった梅娘がしばしば海の生物の名を小説の題名としたのは、この時期海に強く引かれたことにも関係があるだろう。済南では大明湖の近くに住んでいた。梅娘はこの頃よく講釈場に行き、講釈師たちが語る歴史物語や俠客物語に陶醉した⁽¹⁹⁾。

やがて「満州国」が1932年3月1日に「建国」され、学校教育も徐々に回復された。1933年梅娘は13歳の時に省立女子学校に戻り、高等学校部に進学した。自伝色が濃い梅娘の小説「蟹」は、主人公の鈴鈴のこの時期の高校生活を次のように書いている。

鈴鈴の高校生活は年末にも終わろうとしているのに、勉強はちっとも忙しくない。教科書はほとんど手に入らないし、専門科目の先生たちは相次いで学校を離れ、故郷へ帰ってしまった。授業は自習になり、または日本

人の女の先生に料理を教わるのだ。作るのはすべて日本料理であり、最初は好奇心で興味が沸いたが、しばらくすると口に合わないためまったくつまらなくなってしまった⁽²⁰⁾。

国文科教員の王春沐も学校を離れて従軍したという。学校の授業は中国近代史が中止になっただけで、ほかの授業科目には大きな変化は見られなかった。国文教員の孫曉野（孫常叙、後に東北師範大学教授、古代中国語研究者）が「憂国の士」屈原の詩を教え、梅娘ら学生は深く感動を受けた。読書会で、梅娘たちは蕭紅と蕭軍が書いた『跋涉』⁽²¹⁾を読んで、示唆を受け、自ら雑誌を作り始めた。梅娘が小説を書き始めたのもこの高校時代からだった。1937年の夏、梅娘が日本に留学している間に、高校時代の国文科の恩師孫曉野は梅娘が書いた作文集を長春の益智書店の責任者宋星五に推薦した。これを読んで宋星五は「これは二冊目の『寄小読者』だ」と称えた。『寄小読者』とは、氷心が少年少女に対し手紙の形で父母や兄弟、友人への愛を語りかけた散文集である。作文集はこの年『小姐集』（筆名は「敏子」、未見）と題して長春益智書店より出版され、梅娘は作家としてのデビューを果たしたのである⁽²²⁾。

なお、『小姐集』については、林里が次のように評価している。

『小姐集』の筆致は繊細だ。彼女は自分の美しい記憶と美しい夢とを記録し、彼女は愛しい人々や物語を編み上げ、自然を賛美し、自己表現している⁽²³⁾。

『中国抗戦時期淪陷区文学史』は蕭紅と蕭軍の『跋涉』を「東北淪陷後第一冊目の小説集」と認める一方で、「1937年以前、東北で出版された地元の作家による小説集はわずか二冊しかない。梅娘の『小姐集』と励行健の『風夜』である」と記載している⁽²⁴⁾。矛盾なく書くとすれば、『小姐集』は第三冊目だということになる。励行健（筆名は今明）の短編小説集『風夜』は1935年に出版され、検閲を避けるため「上海発行」と記している。励行健は大家族の崩壊を描いて「満州巴金」とも賞されている作家である⁽²⁵⁾。

残念なことに、『小姐集』と後に1940年に出版された小説集の『第二代』とはともに今だに現存が確認されていない。筆者はこれについて梅娘本人に尋ねてみたが、返事は以下の通りであった。

九一年私が長春に淪陷区文学国際シンポジウムに参加した際、孫曉野先生と一緒に元益智書店編集者である李乃庚先生を訪ね、李先生も一所懸命『小姐集』と『第二代』を探してくれたが、結局無駄だった。歴史がすでにこれを埋没させたのだから、これを歴史とともに過ぎ去らせることにしようと思は思う⁽²⁶⁾。

二. 文選派、文叢派と芸文誌派

1. 「建国」までの「満州」文化界

当時〔私たちは〕まだみんな祖国の文学という母体の中で育ってきた新生児であり、「五・四」以来の反帝国主義反封建主義の優良な文学伝統を引き継いだ。二十年代末期、我が国の左翼革命文学思潮は或る人々には深く影響を与えましたが、私たちはみな悪い時期に生まれてしまった。母体を離れるやいなや、東北の山河はもう様変わりしていたのだから、間違えて生まれたと決まってしまうのであった⁽²⁷⁾。

王秋螢（1913—）が自分がたどってきた道を半世紀後に振り返る時に言った言葉、「間違えて生まれた」という一言は実に重い。「満州」の作家たちはほとんどが多かれ少なかれこのような宿命感を抱いているのだろう。

清朝の発祥地である「満州」は長期にわたって閉鎖的だったので、近代化の歩みも「関内」より遅かった。「満州」新聞界最初の新聞『盛京時報』が日本人経営により奉天で創刊されたのは1906年のことだった⁽²⁸⁾。張作霖の軍閥統治の下で、『盛京時報』だけが自由な言論の権利を得ていた。そのため「五四」時期から新文学の作品を載せ始めたのも『盛京時報』だった。中国人が経営す

る新聞が相次いで創刊され、新文学が「満州」の大地に流行したのは1928年張学良が国民政府の統治下に入ってからのことである。

1928年までに魯迅、胡適、郭沫若、氷心、郁達夫、王統照ら新文学作家の作品はすでに『盛京時報』により転載されていたが、1928年からは丁玲、蔣光赤ら左翼作家の作品および日本のプロレタリア文学理論や作品も続々と「満州」に輸入され始めた⁽²⁹⁾。『盛京時報』の主筆を務めた穆儒丐(?—1946)⁽³⁰⁾は「満州」文壇における「最初の比較的著名な小説家および翻訳家」⁽³¹⁾である。穆儒丐は「趣味が広く、学識もわりと深く」⁽³²⁾、1919年より『盛京時報』に小説や脚本を発表し、ユゴーら外国の著名作家の小説を翻訳し始め、「満州」新文学初期の展開に大きな役割を果たした。

「満州」においてはヨーロッパ19世紀のリアリズム文学や始まったばかりのプロレタリア文学など外国文学の影響も二十年代末から大きくなった。大まかに言えば北のハルビンは主としてロシア文学、南の瀋陽は大体欧米や日本の文学から影響を受けている⁽³³⁾。

1931年9月18日「満州事変」(「九・一八」事変)が勃発したが、これは文化的な破壊も伴った。瀋陽のマスコミ界を例にして見てみよう。「日本軍は瀋陽を占領したのち、新聞による関内各地の報道を一切禁止し、関東軍はスパイを派遣して、郵便局を封鎖し、中国人発刊の新聞・出版物を検閲・発禁にした。そして、日本人の出版した『泰東日報』、『盛京日報』、『満州報』などは、無理矢理に中国人に予約講読させた。日本軍は、中国人が設立した新聞社や通信社にやってきて、原稿を焼き捨て、事務用品や印刷設備を破壊し、さらに、社員を拉致し、はげしい暴行を加え、新聞社・通信社を封鎖した」⁽³⁴⁾。

翌年3月、日本人にとって「昭和最大の夢」であった「満州国」が「誕生」し、「満州」の地はそれから大きく変貌した。「日本人、中国人、朝鮮人、ロシア人、蒙古人、満州族、北方少数民族など、さまざまな民族を含み、旧皇帝から旧貴族、軍人、官僚からテロリストとスパイまで、さらに転向学者や移住農

民や俳優や作家，詩人に至るまで，ありとあらゆる種類の間人たちが，この壮大な夢と欲望に参画しようと，中国大陸東部の地に蝟集したのである」⁽³⁵⁾。

「満州事変」(「九・一八事変」)が起きた時，梅娘はまだ11歳の吉林省立女子中学校の中学生だった。学校の隣りにある吉林省国民党本部のビルの屋上に翻っていた中華民国の「青天白日旗」が徐々に降ろされるのを目撃し，強いショックを受けている⁽³⁶⁾。

それでも時とともに文化活動は「事変」の打撃から徐々に回復していく。1933年春，「冷霧」，「白光」などの文学団体が続々と誕生した。1934年日本人の飯河道雄が奉天で東方印書館を開き，大型総合雑誌『鳳凰』を創刊した⁽³⁷⁾。梅娘がデビューした1937年になると，「当時の各新聞や雑誌はみな資本主義的な経営様式の中で発展を求めたので，販路を広げ，更なる利潤を得る為，読者の好みに迎合し，刊行物を豊富多彩にしなければならないのだった」⁽³⁸⁾。梅娘の『小姐集』を出した益智書店も，利益を得るため「関内」の「新文学作品の海賊版を数多く出した」⁽³⁹⁾。

1937—1941年前後は「満州」文学の繁栄期であり，小説の創作はとくに際立っている⁽⁴⁰⁾。この時期において，目立っていたのは文選派，文叢派と芸文誌派の対立である。

2. 文選派，文叢派

1938年12月奉天で王秋蚩，陳因，王孟素らは「文選刊行会」を結成し，大型純文芸雑誌『文選』を創刊した。「文選刊行会」の同人は文選派と呼ばれる。『文選』の「刊行縁起」には三つの原則が示されている。一，文芸には歴史的な使命感が必要である。二，「今の文芸は大衆を教育する利器であり，現実を認識する道具である」。「芸術のための芸術」は必要なく，真実を書き，真実を暴露するべきである。三，五四以来の新文学遺産を受け入れるべきである⁽⁴¹⁾。『文選』の第一輯は二十万字余り，第二輯は四十万字前後の紙幅があり，呉瑛

の「翠紅」、梅娘の「傍晩的喜劇」（「夕方の喜劇」）などは最初に『文選』に掲載されたのである。第二輯の後は「毎月叢編」を出版し、『文最』、『文穎』といった『文選』の姉妹雑誌を出している。『文選』の同人らはその後また「文選小叢書」を発行し、1941年10月には袁犀の短編小説集『泥沼』、1941年9月には王秋蚩の短編小説集『小工車』を刊行した。

文選派と主張が似ていて、メンバーもかなり重なっている流派には新京（長春）の文叢派がある。新京と改名され、「満州国」の首都とされた長春は数年の間に、文化人の集中する場所となった。1938年7月、新京発行の『大同報』は『文芸專頁』を設け、梁山丁、呉瑛ら『文芸專頁』のメンバーはまた「文叢刊行会」（同人は文叢派と呼ばれる）を作り、1939年から1940年の間に「文芸叢書」を四冊編集した（呉瑛の『両極』、山丁の『山風』、梅娘の『第二代』、王秋蚩の『去故集』）。

1937年年末日本から臨時帰国した梅娘は実家から学費をもらえず、1938年から自立をはかって『大同報』で校正係をしながら週一回の婦人欄を編集していた。恋人の柳龍光も新京にやってくる、『文芸專頁』の編集者になった。やがて梅娘は実家と決裂し、柳龍光と結婚する。「梅娘と柳龍光の陋居はさっそく当時文選、文叢派若い作家たちの文芸サロンとなった。この時期の梅娘は、社会意識と民族意識を高め、自覚的に大衆の生活を反映する小説を書き、大衆における“永久性”を求めている」⁽⁴²⁾。1938年末に柳龍光が『大阪毎日新聞』の記者採用試験に合格すると、梅娘もともに日本に赴いたが、『文芸專頁』の編集者糸己〔柳龍光〕は梅娘と日本に渡った後も、『華文大阪毎日』の主編を務めながら、依然として遠くから文選、文叢派と互いに呼応し、芸文誌派と論争する態勢を取っていた」のだった⁽⁴³⁾。

日本の「同化政策」への反発もあり、文選派、文叢派の同人は「現実を暴露する作品、地方色豊かな作品及び東北人民の日常生活を描く作品は、すべて郷土文学だ」⁽⁴⁴⁾と認識し、郷土文学を強調していた。

王秋螢の小説では、肺病に苦しむ貧乏学生、退役した兵士、零落した女芸人、行商人、無頼小市民、人力車夫、産婆等が主人公になっている。「小工車」⁽⁴⁵⁾は作者の少年時代の撫順鉱山区での体験を生かし、「満州国」「開発」の裏側にある労働者の悲惨な生活を描いている。

1941年、絶え間なく小説を書き続けたという⁽⁴⁶⁾袁犀は、「隣三人」、「十天」、「母与女」、「海岸」、「一只眼齐宗和他的朋友」、「遙遠的夜空」、「泥沼」を収める短編小説集『泥沼』を完成した⁽⁴⁷⁾。「一只眼齐宗和他的朋友」（片眼の斉宗と彼の友人）⁽⁴⁸⁾の主人公の斉宗は古本の販売人であり、こっそりと『静かなるドン』（ショーロホフ）や『母親』（ゴーリキー）などソ連の書籍を売っている。「隣三人」の主人公の青年の「私」は売春婦や無一文の労働者に暖かみを感じ、下層階級の人たちの充実した人生を発見する。『泥沼』は出版されてまもなく発行を禁止された⁽⁴⁹⁾。袁犀の「流」⁽⁵⁰⁾は地主にさんざん搾取され、さらに政府軍の兵士の略奪をも避けられない農民の極貧の生活ぶりを描写している。

梁山丁の代表作とされる農村の暗黒面を描写した長編小説『緑色の谷』（『緑なす谷』）⁽⁵¹⁾は侵略に伴う機械文明に直面した農村の破産してゆく現実を描いている。『緑色の谷』はショーロホフの『静かなるドン』を参考にし、また有島武郎からの影響も受けたと指摘されている⁽⁵²⁾。

文選派、文叢派の同人は検閲の目を潜るため、表現技巧上にも工夫をしなければならなかった。梁山丁は「短編小説『身障者』『残缺者』」のなかで、わざと主人公の家族三人をそれぞれ「口の不自由なもの」、「耳の不自由なもの」、「足の不自由なもの」とし、偽満州国の王道楽土には、身体の自由な人間が一人もいないことを象徴⁽⁵³⁾させ、為政者の宣伝する「王道楽土」は現実とはあまりにも矛盾していることを暴露している。

3. 芸文誌派

1937年3月古丁（1916—1964）は少年時代の先生であった稲川朝二に支えられて『明明』を創刊した。その創刊号で、古丁は文学には国境がないと強調し、第3号でまた「魯迅の作品は国境を超えて全人類の宝となった」と述べた。『明明』は1938年9月に停刊、それに代わって、1939年6月に『芸文誌』が創刊され、古丁、爵青（1917—1960?）、小松（1912—）ら同人は芸文誌派と呼ばれた。

芸文誌派は当時の文芸界が低級なものに占められている現状に対し、新文学はまず量的に発展しなければならないと提唱し、「写 [書いて] 印 [印刷する] 主義」および「方向のない方向」というスローガンを提示した。古丁は以下のように述べている。

同調できると認めたものは、名を知っているか、面識があるかを問わず、援助をお願いし、宣伝を頼む。人それぞれが新しい道を拓くことを期待するが、その方向は問わない。うわついた調子になることなく、鸚鵡のまねをせず、着実に書くまたは翻訳をするのなら、すべてわれわれの友人であり、友人に求めるのはただ「強靱さ」だけ。それゆえ、われわれは、「書いて印刷する、これで十分だ」と、絶えず言ってきたのである⁽⁵⁴⁾。

芸文誌派の爵青はモダニズム手法を用いて実践的な小説を書き、文学の目的性を否定し、写実主義に批判的な態度を取った。爵青はまたジョイスやブルーストを紹介し、ジイドの方法も学んだ。爵青の代表作は「盛京文学賞」を受賞した中編小説『欧陽家の人們』（『欧陽家の人々』）⁽⁵⁵⁾である。

古丁は北京大学の学生であった時は「北方左連」の活動に参加し、「緊張した左翼文学運動に身を置き、その後、深い傷を負って、生まれ故郷満州へもどってきた」⁽⁵⁶⁾。それからは三年間の「虚脱」状態だった。「たつぷりと三年間、文学にかかわる本は一冊も読まず、文学にかかわることは一字も書かなかった。ただ友人に文学の無用および文人の無能を吹聴していた」⁽⁵⁷⁾。古丁の長編

小説『平沙』⁽⁵⁸⁾の主人公である「満州」の「余計者」⁽⁵⁹⁾とも言える白今虚には古丁自身の影も潜んでいる。

李欧梵は郁達夫ら五四世代の文人が激変する時代にあたって伝統的な役割を切断され「余計者」となったことを論じて以下のように語っている。

中国の知識人はすでに国家から切り離されていた。高級教育は今や去勢と同義語になった、すなわち、政治権力への伝統的な道筋を奪われたため、近代の中国知識人は軍閥の侮辱にまた後には蒋介石南京政府の高圧的な措置に自分の身を委ねない限り、政治的に不能になるしかなかったのである⁽⁶⁰⁾。

「淪陥」時代が来ると、古丁ら知識人は異民族の支配に直面して、軍閥や蒋介石政府に身を委ねることさえ考えられず、まさに二重の去勢を余儀なくされたのである。古丁ら芸文誌派は生活と保身のためか、「面従腹背」をしたのである⁽⁶¹⁾。北村謙次郎（1904—1982）は『北辺慕情記』という回想録の中で、古丁の「面従腹背」ぶりを記録している⁽⁶²⁾。そのような「面従腹背」により、現在の研究者により「異民族の侵略を受け、その反発のなかから生まれた民族的な抵抗体の多様性と重層性を明らかにするには、古丁がもっともふさわしい」と見なされている⁽⁶³⁾。そのせいか、古丁は「自分および自分と似ている人々を嫌う」⁽⁶⁴⁾。彼は「批判を外へ向けて放とうとはしない。彼の批判の刃は、そのまま彼自身の内部に食いこみ、そこで被虐的な対話をくりかえす。彼の作風がしめすシニカルな歪みや、ユーモラスな味わいも、それとのはげしいきしみのなかから生み出されたといえよう。この傾向は古丁にかぎったことではなく、満系作家の共通した精神構造でもあった」と指摘されている⁽⁶⁵⁾。

ともかく、「占領下にあつて日本の権力という現実を容認することは、抗日戦争勝利の日まで生き残るための一時的必要だとみなされた」⁽⁶⁶⁾ということは考えられよう。そして、文人である限り文筆活動をしないと生き甲斐を失う恐れもあり、さらに自分自身の「二度と戻らない生命」も無駄にはできず、1935

年ごろ古丁はようやく「虚脱」状態から脱出し、創作活動を再開し、芸文誌派同人とともに日本文化人との結びつきを強め、新文学の発展をはかるようになったのだった。

古丁は文壇の制度化、職業作家の出現を期待していた。彼は「日系作家の中で、北村謙次郎氏と檀一雄氏が相次いで職業作家になった。(中略)日系作家は最終目標を東京文壇に置くことができる。(中略)が、われわれは文を書きながら壇を作らなければならない、この苦しみはただものではない。しかし、このただものではない苦しみを嘗めないで、満州文学は本格的に発展することができないのである」と述べている⁽⁶⁷⁾。一方で、現状へはかなり悲観的である。彼は、「原稿料と版税は職業作家を作れるが、原稿料と版税はめでたい三文文士も作れる。こんな考えから、私には満州に職業作家が現れるのを期待する勇気があまりなくなる」⁽⁶⁸⁾とも言う。

古丁は広く外国の文学を翻訳し紹介することを提唱し、「日本文壇を見ると、世界文学の翻訳がいかに彼らの中身を豊富にしたかがわかる」と言っている⁽⁶⁹⁾。当時「満州」における外国文学は基本的に日本語から翻訳されたものである。古丁は改造社が出版した全七巻の『大魯迅全集』の各巻末にある松枝茂夫や増田渉ら（それに匿名の胡風）が日本の読者のため書いた「解題」を翻訳し、『魯迅著書解題』と題して1937年11月の『明明』に発表した。『魯迅著書解題』は、魯迅に縁のない「満州」の読者に魯迅の世界を垣間見るチャンスを与えた。

古丁は文化の建設にも熱意を示している。彼の夢の一つは、「日本の『広辞林』のように、死語と活語をともに収め、過分の望みを許されるならば、更に土語を加え、『漢語大辞典』を編纂する」ことだった⁽⁷⁰⁾。

文選派、文叢派と芸文志派の論争について、梁山丁は次のように記憶している。

ちょうどその時、雑誌『明明』は、日本人の後押しを得て創刊され、文

壇に希望をもたらしてくれた。『明明』に掲載された小説『山丁花』は、北満伐採夫の苦しい生活を細かく描き、地方色の豊かな作品だった。それを読んで、私は、早速『郷土文学と山丁花』という感想文を書いた。文章の中で、私は、郷土文学の現実性を指摘し、作家たちに郷土文学の作品を多く書いてほしいと注文した。図らずも、この短い文章は大論争を起こしてしまった。彼等は、「郷土文学」を「大豆とコーリャン」や「獵奇文学」と皮肉る。しかし、私の主張を支持する文壇の友人も多くいた⁽⁷¹⁾。

論争は約三年間続いた。郷土性と近代性についての議論は本来中国近代文学の発展に付き物ともいえるが、ここで「満州国」の背景も加わって、議論はさらに多元化し、複雑なものになってしまった。近年では、次のような意見も出されている。「文選」と“文叢”派の中の一部の人は内外文化交流の意識と寛容さが足りなかった。彼らは日本人と仲良くすることをすべて日本人に迎合すると見做し、そこから敵対の心理が生じ、“芸文誌派は日本人のスパイだ”などとさえ言った⁽⁷²⁾。

なお、文選派、文叢派と芸文誌派とは明確に分かれているわけではなかった。呉瑛や袁犀らは両方に寄稿していた。とくに文叢派と見なされる袁犀の場合、1937年12月13日瀋陽にいた時初めて「袁犀」という筆名を使って短編小説「隣三人」⁽⁷³⁾を書き、6日後にはまた短編小説「母与女」（「母と娘」）⁽⁷⁴⁾を書き、この二編はともに長春にある芸文誌派の月刊誌『明明』に掲載されたのである。

三. 「満州」の女性作家

1986年7月、瀋陽の春風文芸出版社は梁山丁が編んだ『東北淪陥時期作品選 長夜螢火——女作家小説選集』を出版した。同書には悄吟（蕭紅）、劉莉（白朗）、梅娘（孫嘉瑞）、但娣（田琳）、呉瑛（呉玉瑛）、藍苓（朱盛華）、左蒂

(羅麦), 朱媿(張杏娟)ら八人の三十一編の小説が選ばれている。孔範今らが編んだ『中国現代文学補遺書系・小説三巻』(明天出版社1990年済南), 『中国新文学大系・短編小説巻・1937—1949』第4巻(上海文芸出版社1990年)にも「淪陷区」作家の作品が収められた。両書の刊行は長い間忘れられていた東北淪陷時期の女性作家の作品に再び光を当てた。1934年に「満州」を脱出した悄吟(蕭紅)を除くと、梅娘と呉瑛が「満州」文壇に活躍していた最も重要な女性作家だといえよう⁽⁷⁵⁾。

1937年年末臨時帰国した梅娘は『大同報』で校正係をしながら週一回の婦人欄を編集していた。自立したお陰で、「小姐」(お嬢さん)の生活から懸け離れた庶民の生活をさらに理解できるようになり、小説の題材も女性には限らず、さらに広い範囲に展開するようになり、後に「侏儒」や「傍晚的喜劇」(「夕方の喜劇」)を書くための準備にもなった⁽⁷⁶⁾。

梅娘の二冊目の短編小説集『第二代』について梁山丁は『『小姐集』は少年少女の愛と憎しみを描いているが、『第二代』は大衆の時代の息吹を表現している」と称えた⁽⁷⁷⁾。梅娘の中編小説「蟹」は女性の独特な視点から家族に満ちていた矛盾を見つめ、女の立場から主人公の運命に深い関心を寄せている。「蟹」を収めた同名の中短編小説集は後に梅娘の代表作と見なされている。

ちなみに、阿茨は梅娘の短編小説「侏儒」⁽⁷⁸⁾を以下のように論じている。

「侏儒」はそれら[愛情物語など]とは全く違う。最も注意すべきところは作者の題材はすでに男女の仲から社会へと拡大し、さらに人間社会の醜悪さと感情まで描き出すに至ったことである。この方面において「侏儒」は恐らく最も成功した作品であろう。

また、当時の「満州」文壇を振り返り、上官纓は次のように語っている。

最初に梅娘の小説に触れたのは1940年前後、私が十歳とちょっとという年だった。左蒂(羅麦)が編集した『満州女作家作品選』に梅娘の中編小説「蚌」が収められていたのを覚えている。私は梅娘小説のすがすがしく

て超然とした筆致に強く引かれて、彼女の早期のほかの二冊——『小姐集』と『第二代』を捜すことにした。それからまた彼女の中編小説『蟹』および『魚』を読んだ。私はまだ子供であり、完全に理解できないにもかかわらず、それらは深い印象を残し、私の人生の大半にその影響を与えた。まさに私が文学の道を歩み始める上での入門的な読み物であった⁽⁷⁹⁾。

吳瑛（1915—1961）については今日でも「始終東北淪陷区にとどまり続けた女性作家として、吳瑛は間違いなく最も影響力があった一人である」と評価されている⁽⁸⁰⁾。吳瑛は満州族の出身で吉林市に生まれた。本名吳玉瑛。吉林女子中学校卒業後は『満州日報』、『大同報』、『斯民』などの新聞社や雑誌社で記者や編集員の職についた。1939年11月に新京文叢刊行会で出版された短編小説集『両極』は第一回民間文芸賞——「文選賞」を受けており、この中には「新幽霊」、「女叛徒」、「両極」、「望郷」など小説十編が収められている。『両極』の「序言」は糸己（柳龍光）が書いており、「彼女の作品は彼女の生活と一致している。（中略）人生の真実を表している」と批評している。『両極』は「古き中国の児女」を描き、男性中心の伝統観念に征服され、踏みじられる女性の多少灰色を帯びた感情を訴えている。古い格式にこだわる旧家の内情を描いた中編小説「墟園」、生活のため娼婦にならざるを得なかった女性を主人公にした短編小説「翠紅」など、吳瑛は多数の作品を相次いで発表した。

「満州」代表として第一回大東亜文学者大会に出席したことがある吳瑛は、当時自分の気持ちおよび苦悩ぶりを次のように語っている。

私は私の生活の趣味の強さの範囲を増強することもできず、また一切の生活関係を拡大し鞏固にすることもできぬ。それ故私が文学に膠着してゐるのは、今に至り光栄とするところではあるが、やはり苦痛を忍受してゐるのであり、この苦痛は大東亜文学者大会に出席して後一層強まつたのである。

過去に在つては、私は沈黙に甘んじなかつた、開かれぬ処女地と称され

た満州文壇のために、七八年来些か搏闘の筆墨を投擲した。最初は、面白さからであったか、生活の活力を發揮したのだつたらうか、満洲新文芸建設の途上に、成熟せぬ歩みを運び、満洲に有力な文学を打ち建てた人々の後を追隨し、私の決して閑居してゐたのではなかつた生活を表現したのは、まことに汗顔の至りであつた。

この七八年来、私は満洲文学の進展について瞑想して来た。過去に対しても未来に対しても回想と期待とで私のこの空虚な物足りなさを埋めようとして来た。

この比較的短いとは言へぬ文に従つた間に、私はけんめいに私のよく知つてゐる事物を描いた。多くは女性を対象として描写し始め、現在私の身边を圍繞してゐるものの姿をもつて、現代社会に生きてゐる女性群像の生活方式を説明しようとした。(中略)

私は生活の豊かな路に対して、分を越した空しさを感じずうになつた。文章 [は] 既に私の彷徨を克服し得ない、ましてこの時代の大業をびつたりと吻合させ処理することもできない。私は何と弱い小さな存在者であらう！⁽⁸¹⁾ (下線は筆者所加)

「満州」の郷土に生長し、生活している満洲族の呉瑛は、この一節の後で、未来の歴史家が今のこの時代をどのように評するだろうかと迷い、「暴風の海を行く船の如くに、あらゆる不安と無力の矛盾さをいつばいに感ずる」と訴えている。灰色のムードが漂っている中、呉瑛は自分の中にある連帯感を再確認し、次のことを語った。

私は中国にいる謝氷心、丁玲、蕭紅、謝氷瑩ら知名な女性作家を思い出し、これらの女性作家はすでになくなった蕭紅を除き、今は異なる理念に属して活動している。未来には理念を共有するかもしれないが、今現在は些か期待できないような気がする。

反対に、上海の関露や北京の梅娘は、大陸の時代に献身する女性文学の

中堅者になれるのである。梅娘はかつて満州と華北にとっては女性文学の開拓者ともいえ、女性文学に相当な業績をあげた。私たちは長い間の親友でもあるから、梅娘をととても信頼している⁽⁸²⁾。

梅娘と同じ時期に日本に留学した黒龍江省出身の女性作家但娣（本名は田琳，1916—）⁽⁸³⁾もまた「満州」の重要な女性作家の一人である。中篇小説の「安荻和馬華」（「安荻と馬華」）⁽⁸⁴⁾は戦争を背景に若い男女の悲しい愛情を描いていて、但娣の出世作となった。

1935年に上海に脱出した劉莉（本名劉東蘭，筆名はまた白朗，1912—）が『四年間』に描いたのは主人公の珈黛が結婚してから四年間の物語である。蘇青の『結婚十年』を思い出させるが、『結婚十年』は結婚した女性の不幸の物語だとすれば、『四年間』は結婚した女性の悲惨な物語だと言えよう。珈黛は愛のため学校をやめ結婚をしたが、生んだ三人の娘は相次いで病気でなくなってしまふ。再び社会に出てはみたが、こんどは小学校で教えることにも失望してしまい、四年間はこうして過ぎ去ってしまう。

1935年に創刊された『斯民』（半月刊）は、数少なくない「満州」の女性作家の文学創作の出発点を記録している。吳瑛の小説集『兩極』に収められている大多数の小説は『斯民』に掲載されたのである。梅娘も『斯民』に「風塵」を発表している⁽⁸⁵⁾。1941年以後、各雑誌は相次いで女性作家の「特輯」を出している。『興亜』1943年7月号には「女作家情書特輯」、『青年文化』1943年10月号には「女性文学特輯」、『新潮』1944年2・3月号には「婦女文芸特輯」、『新満州』1944年10・11月号には「新進女作家展」がある⁽⁸⁶⁾。

四. 異なった「満州」イメージと日本人

文選派、文叢派に「暗黒」に描かれた「満州」、芸文志派が「面従腹背」しなければならなかった「満州」は、日本人にとっては「浪漫的」なところであ

った。大連居住の評論家西村真一郎曰く「満州文学」は「浪漫的性格を発展の現実的過程として持つ」ものでなければならない⁽⁸⁷⁾。「満州国」では、『満州浪漫』⁽⁸⁸⁾という名の雑誌も作られたのだった。

「大陸の一角に『王道楽土』を建設するというスローガンはまさに明治・大正の脱亜や富国に代わりうる昭和の時代的使命であると、多くの日本人には信じられたのである」⁽⁸⁹⁾。「脱亜入欧」、「富国強兵」といった日本の近代的な精神は「大陸開拓」の野望へと延長されていく。「満州」——経済的楽園、「満鉄」——金の卵を産む鶏といったように「満州」を植民地視すること、そして「満州事変」の軍事侵略に対する「美化と承認とは、一九三〇年代から一九四五年の日本の敗戦までの間の大多数の日本人の共通認識」⁽⁹⁰⁾であった。「満州」へは、夢と新天地を求める人々、故郷にいたたまれなくなった人々、追いつめられた貧しい人々の群れがやってきたのだった。

北村謙次郎にとって「満州国」の「首都」である新京は「一種不可思議な衝動のみ充満し、議論が多く、なにかもどかしい気持ちばかりで明け暮れていた」ところである⁽⁹¹⁾。彼は「その頃の満州国官吏」、そしていわゆる「大連イデオロギー」と「新京イデオロギー」の対立とを次のように描いている。

その頃の満州国官吏というと、よく飲みよく遊びもしたようだが、協和服を着込んで建国精神や協和理念を説くあたり、颯爽たる気概にむしろ筆者などアテられ気味で、渡満当初はひどく当惑したことを思い出す。新京だけならまだしも、彼らは日本に出かけようが大連あたりへ出張しようが、臆面もなくこの「満州風」を吹きまくったから、ずいぶんヘキエキする向きが少なくなかった筈だ。そこでこの「風」を新京イデオロギーと尊敬し、満鉄マンあたりによって代表される自由主義的な大連イデオロギーなるものが、はっきりこれと対立することとなった⁽⁹²⁾。

「満州国」に來た文人の場合、檀一雄の例を見てみよう。「生まれた時から自分の故郷を喪失していた」と自ら『青春放浪』⁽⁹³⁾で述べた檀一雄は東京帝国

大学を卒業後、満鉄への就職依頼という口実で大連、新京、奉天、ハルビンを放浪した。文学青年の檀一雄にとって「満州」とは可能性の満ちた浪漫的な世界であった。後に書いた『青春放浪』は青春の放浪を文学的に表現した作品である。檀の文学は「『浪漫』は『無頼』に錯るということ、『放浪』はその魂の養いであるということ、それらを檀一雄は日本のロマンとして形成した」⁽⁹⁴⁾と評価されている。檀一雄について川村湊は次のように指摘している。

彼の考え方の根底にあるのは、現実にある満州国を否定し（あるいは無視し）、その地下に理想としての“大満州国”という夢を見ることだった。そして、それは地下の夢を語ることによって、地上の、現実の満州国の問題点を、一切黙殺するという態度とならざるをえなかったのである⁽⁹⁵⁾。

一方、「満州」の作家からは、例えば「親日的」とされる芸文誌派作家古丁の作品からでも、「浪漫」を感じられないのである。古丁『平沙』の主人公の白今虚が「新城」（[新京]）の「土と砂」で作られた「新」に抱いたイメージは以下の通りである。

彼はこれらの色鮮やかに塗られた土と砂から、自分の期待している新しい靈魂と智慧を見出せない。彼は大多数の住民は相変わらず卑俗と下賤に止まっているのを感じている。彼はこの新と旧の間の巨大な溝は実に深くて広いことを実感している⁽⁹⁶⁾。

「満州」に來た日本文人には左翼文人や転向文人も目立つ。左翼的な評論活動をし、「満州文学」の翻訳は「かれ一人の肩になわれていた」といわれる大内隆雄（本名山口慎一、1907—？）もその一人である。彼は現在の研究者により「脳の中では、『満州国』の『文化の革命』と、中国プロレタリアートの革命文学運動は、矛盾するものではなく、むしろ連帯し、ともに闘うものとしてとらえられていた」と見なされている⁽⁹⁷⁾。日本共産党は1928年の「三・一五事件」、1929年の「四・一六事件」といった全国的大検挙により、ほぼ潰滅状態にあった。「満州」へ渡るとは日本プロレタリア文学運動の転向の仕方

の一つとなった。プロレタリア作家であった山田清三郎は転向した後に権力への奉仕の道を選び、「満州」に新生を求めに渡ってきて、満州文芸家協会委員長などの地位を占めた。そして満州代表六人（山田清三郎、呉瑛、古丁、爵青、パイコフ、小松）の引率者となって1942年11月3日から5日まで東京で開催された第一回「大東亜文学者大会」に出席したのである。

五. 文芸政策および文学賞

東北淪陥十四年間の新聞事業について、張貴は「その最も大きな特徴は、日本関東軍が直接統治・指揮した、軍制・官制の新聞事業だったことである」と指摘している⁽⁹⁸⁾。

「満州国」弘報処長である武藤富男もまた「浪漫」精神を持っていた一人である。「弘報処長たる私にとっては、文芸家だけでは足りない、美術、音楽、映画、文学、演芸、写真などの分野に属する人たちを、これまた素人、専門家の別なく、ひっくるめて面倒を見よう、そして満州国を美しく、楽しいところにしようと思った。言ってみれば、この国土にルネサンス時代を招来せしめようとしたのである」⁽⁹⁹⁾と、武藤富男はその「夢」を語っている。

「司法官出身の私は、日本の新聞界については無知であった」と承知の上で、武藤富男は「戦時に適合する新聞発行態勢を整えておかねばならぬと思」い、次のような政策を考えていたという。

古い国で伝統ある新聞をもっている日本にとっては、この戦時体制に備える報道機関紙を整備することがなかなか大変なことであるが、満州国ではそんな手のこんだことをしなくとも、法律の力をもって、新聞経営者の受け入れ易い方策をとれば、それは可能である。すなわち、有力新聞社を数社、特殊法人として設立し、現存する諸新聞社の社名をそのままにして、これを特殊法人にとりこみ、各地の小新聞社をその傘下におくことに

すればよい。勢力微々たる満語（中国語）の新聞の現状には、規制をつけず自由に発行せしめ、反満抗日紙と認めたものは、検閲、発禁等をもって臨めばよい。満語新聞には、むしろこの際、政府が資金を投じて、全満に行き渡る大規模の新聞社を作り、満系記者を就職させて、取材させる方法をとる。今まで個人か個人同様の者が経営していたものは、協力するか、合併してもよし、独立を守らせてもよい、経営者の自由とする。

ここにおいて、法律学をやり、裁判官をやり、満州法制に関係した私は、新聞社法という法律をもって新聞の活動を規制あるいは発展させるという方策を考え出したのであった。

(中略)

旧体制をこの非常時代に一挙にして改革し、迫り来る開戦態勢に対応しようとしたのが、新聞新体制の目的であった⁽¹⁰⁰⁾。(下線は筆者所加)

武藤富男の回想録『私と満州国』によると、1941年1月1日の新官制⁽¹⁰¹⁾による弘報処所管事項は次のようだった。

- 一. 世論の指導に関する事項
- 二. 文芸、美術、音楽、演劇、映画、唱片及び図書などの普及に関する事項
- 三. 重要政策の発表に関する事項
- 四. 弘報機関の指導監督に関する事項
- 五. 宣伝資料の統治に関する事項
- 六. 出版物、映画、唱片、其他の宣伝物の取締りに関する事項
- 七. 放送事項及び報道通信の指導取締りに関する事項
- 八. 情報に関する事項
- 九. その他対外宣伝に関する事項⁽¹⁰²⁾

弘報処が1941年3月23日に作成した「芸文指導要綱」⁽¹⁰³⁾は間違いなく「満州国」の最も重要な文芸政策である。これに対し、尾崎秀樹は次のように指摘

する。「日系作家も、満系作家も、伝統の中に生きることではか文学を創造することができなかつた。『芸文指導要綱』の精神は、勝手な方向に顔をそらした作家たちの頭上で、おろかしい一人相撲をくりひろげ、満州建国の神話が音をたてて崩れるまで空しい呼号を続けていた」⁽¹⁰⁴⁾。「芸文指導要綱」公表後の状況を梁山丁は次のように語っている。

指導要綱は、明らかに「郷土文学」を意識したもので、暗黒面を書いてはいけななど、書いてはいけない内容を八項目にわたって書いていた。私達は、ひそかに要綱を「八不主義」と称した。このような情勢の下で私達の「真実を暴露し、現実を描写しよう」という主張は、まさに困難極まりない課題だった⁽¹⁰⁵⁾。

芸文に対する首都警察の「検閲」もこれを契機にますます厳しくなってきた。呉瑛の小説『鳴』⁽¹⁰⁶⁾について、首都警察は「夫は日本、妾は満州、父は中国を暗示している。日本の飽くなき貪婪が満州を占領し、更に中国を侵略して将に中国民族を滅亡せしめんとしていると云うことを述べている」、「満系民衆が日本に剝奪されたことを暗示している」と分析し、但娣の『戒』⁽¹⁰⁷⁾についても、「浪漫的色彩を通じて一つの革命的信念を表現したものである」と分析している⁽¹⁰⁸⁾。

1936年『盛京時報』は創刊30周年を記念し、「盛京文学賞」を設立した。1936年第一回は『盛京時報』の元老穆儒巧の長編歴史小説『福昭創業記』⁽¹⁰⁹⁾、1937年第二回は吉林師範大学教授の陶明浚（1894—1960）の『紅樓夢別本』⁽¹¹⁰⁾、1938年第三回は古丁の中編小説『原野』、1942年は爵青の『欧陽家的人們』（『欧陽家の人々』）が受賞した。また「満州国民生部大臣賞」が1938年（康德5年）に設立され、第一回は穆儒巧の長編歴史小説『福昭創業記』、第二回は古丁の長編小説『平沙』⁽¹¹¹⁾、第三回は爵青の長編小説『欧陽家的人們』が受賞した。

川村湊は『異郷の昭和文学——「満州」と近代日本——』の中で、植民地の「文学賞」について以下のように語っている。

文学賞という「制度」は、この時代の植民地下において極めて政治的、国策的な意味を帯びて運用されているのであり、それは明らかに外地における文化政策、すなわち植民地での民族協和、他民族の皇国民化、「国語」としての日本語の奨励といった目標を明確にした「アメ」としてあったのだ。むろんそれは、民族語への抑圧、民族主義への弾圧、非時局的、反体制的な表現活動の制限、圧迫といった「ムチ」と連動したものにほかならなかったのである⁽¹¹²⁾。

一方『文選』を編集すると同時に『盛京時報』の編集も担当していた文選派作家王秋笛は、『盛京時報』の主筆穆儒丐および『盛京時報』文学賞について、以下のように回想している。

彼〔穆儒丐〕は通俗小説家であるが、進歩文学を絶対排斥しようとはしない。同紙〔『盛京時報』〕のその後の文学賞はほとんど青年作家の新文学作品に与えられた。例えば山丁の短編小説集『山風』と疑渥の『天雲集』はみな敵の統治下において勤労人民の悲惨な生活を暴露する作品であるが、彼は漢奸文人の立場に立ってこれらの作品に賞を与えるのに反対することは一回もなかった。当時彼の新聞社での地位からして、各回の文学賞を誰に与えるべきかは、編集権を握っている日本人であっても彼の意見を聞かねばならなかった⁽¹¹³⁾。

ここから文学賞の実際の運営の複雑さを垣間見ることができよう。

六。「満州」離脱

「日本占領時代、日帝に逮捕、投獄、殺害された作家がたくさんいた。金劍嘯・小古などが処刑され、呂大千・王珏・王天穆らが獄中でなくなった。田貴

と李季瘋は後に脱獄したが、まもなく死亡した⁽¹¹⁴⁾と、呂元明が指摘するように、「満州国」の「建国」にともない、作家たちは試練に直面するようになり、そして逃亡も始まった。

まずハルビンでの活躍が注目されていた作家たち。1934年6月、蕭紅と蕭軍(1907—1988)は青島へ脱出し、11月に上海に到着し、抵抗の声を関内で発表した。いっぽう「満州」に踏みとどまった金剣嘯(1910—1936)らはその抗日文芸活動で日本憲兵のブラックリストに上げられ、1936年6月13日日本駐ハルビン総領事館の特高に逮捕され、8月15日他の四人の愛国者と一緒にチチハル市北門外の刑場で銃殺された。梁山丁はしばらく「五家站」という小さな町に避難し、1935と1936年の二年間は文学生涯の「空白の二年」⁽¹¹⁵⁾となっている。

1941年末、左翼文化人に対する「大検挙」が行われ、多くの文化人が逮捕された⁽¹¹⁶⁾。王秋螢は自分の経歴を次のように語っている。

1945年敵が滅亡する直前、私は瀋陽にある日本憲兵隊に逮捕され、尋問を受けた。彼らは私のすべての作品をとっくに集めていただけではなく、私が編集した例えば『文選』や『盛京時報・文学』などの刊行物まで全部そろって罪証として机に載せた。しかも彼らが問題があったとしたところは全部赤ペンでチェックを入れられていた⁽¹¹⁷⁾。

袁犀の場合、「満州」が日本人に占領された後、「郝赫」という「赤」が三つ入った筆名を作り、赤色や革命に憧れていた⁽¹¹⁸⁾。1934年、このペンネームにより、「満州国」郵便検査警察官のブラックリストに入れられ、袁犀は北京に逃げている。北京で暮らしが行き詰まり、自殺を図ったが救われた。間もなく袁犀は東北から亡命にきた学生を受け入れる「東北流亡学生収容所」に入れられ、次いでに東北難民子女学校に入り、その後また知行補習学校に入った。1935年前後袁犀ははじめて左翼文芸作品に触れ、そして巴金小説の情熱およびロマンチックな精神に強く引き付けられた⁽¹¹⁹⁾。1936年春、袁犀は「自由主義学校」と称されていた芸文中学校に受かった。ここで恩師の評論家、美学研究

家常風に出会っている。常風は袁犀の特徴を“憂鬱而熱情”と概括していた。1937年夏、学費を手に入れるため、袁犀は瀋陽に戻った。「盧溝橋事変」後、袁犀は早速ロシア語を習いはじめた。この時、左翼文化人たちに近づき、労働者生活を描く小説を書き始めた。父親は袁犀に医学を勉強することを命じたが、袁犀はそれに従わず、文学を生涯の仕事にすると決心した。1937年短編小説「隣三人」と「母与女」を書き、二編とも長春の月刊誌『明明』に掲載された。翌1938年、短編小説「海岸」と「夜」は瀋陽の『新青年』に掲載され、袁犀はその原稿料をもらって再び北京に赴き、文学生涯を本格的に始めたのである⁽¹²⁰⁾。

梁山丁の場合、農村の暗黒面を描写した長編小説『緑色の谷』（『緑なす谷』）が1943年3月新京文化社より単行本を出された時、弘報処から警戒され、警察局のブラックリストに上げられ、検閲削除を受け、家宅捜査された。9月に梁山丁は「病気の治療を理由に、人に頼んで、汪精衛政権の大使館から出国証明をもらい、そうして山海関を渡り」⁽¹²¹⁾、北京に脱出した。

1941年以後、「入関」（「関内」[山海関以南の地]に入る）した「満州」作家には梅娘（日本から北京へ）、袁犀、梁山丁、黄軍、辛嘉、共鳴、範紫らがあり、彼らは華北にいる「満州」作家群となった。

1941年以後「満州」文学の発表先は「地元の刊行物から、国外の刊行物に移転し」、具体的にいうと、『華文大阪毎日』⁽¹²²⁾に移転する傾向を見せた。梅娘の「蟹」や但娣の「安荻和馬華」も「満州」ではなく、日本で刊行された『華文大阪毎日』に掲載されたのである。この時期『華文大阪毎日』に掲載された作品の数量はほぼ「満州」のいくつかの大きな刊行物に掲載された作品の数量の総和に相当するという⁽¹²³⁾。

1936年16歳の冬、梅娘は吉林省立女子学校高校部を卒業した。この年、最愛の父親が脳血栓で逝去している。その後の進路について、七番目の叔父の張鴻浩は関内と日本の教育状況を比べて、梅娘ら兄弟四人を日本に留学させること

を決めた。梅娘は東京女子大学受験のため吉林省立女子中学校村田琴付学長に推薦状を書いてもらい、1937年の春節後（およそ2月末）日本に渡った。

1930年代の東京女子大学には高等学部、大学部、英語専攻部が設けられており、梅娘は高等学部の聴講生になっている。しかし実際には東京女子大学の授業を受けてはおらず、日本語学習のため兄弟たちと一緒に東亜日本語学校に入り、3月から9月までの中級クラスで学んでいた。7月7日の「盧溝橋事変」後、梅娘は同校を中退し、神田の書店街を歩き来して中国の新文学（魯迅、郭沫若、朱光潜、何其芳ら）を耽読するようになった。晩年の回想には次のように記されている。

わたしにはすでに自分の新しい出発点が見つかった：それは神田のある中国書の書店に行って本を読むことだ。夢にも思わなかった：東京、この日本帝国主義の心臓、この中国侵略戦争の政策決定の場で、中国の抗日後方〔大後方、国民党支配区〕の書籍が売られているなんて！（中略）

私は自分で計画を立てた。まず魯迅先生の本を読破するのだ⁽¹²⁴⁾。

勉強のかたわら若い母親の役割も果たさなければならなかった梅娘は「満州」の文壇にも寄稿を続けた。1940年10月、梅娘の二冊目の短編小説集『第二代』が長春文叢刊行会より「文芸叢刊」第三輯として出版された（第一輯は吳瑛の『両極』、第二輯は梁山丁の『山風』）。『第二代』の中の11編の短編小説（「六月的夜風」、「第二代」、「最後の求診者」、「蓓蓓」、「迷茫」、「時代姑娘」、「落雁」、「花柳病患者」、「傍晚的喜劇」、「在雨的激流中」、「追」）は長春で書かれた少数を除いてほとんど日本で書きあげられた作品である⁽¹²⁵⁾。また中編小説の「蟹」も1941—1942年の間に日本で書かれたものである。1942年、22歳の梅娘は柳龍光とともに帰国し、北京に定住するようになった。

1 清朝時代（1616—1912）吉林、奉天（遼寧）、黒龍江三省の総称は「満州」（語源は満州族の民族名）である。「満州国」の「建国」により「満州」という

地名は「満州国」というイメージを作っている。本稿では本来ならば「中国東北」または「偽満州国」で呼ぶべきところを当時の用語を生かして、便宜的に「満州」または「満州国」と表記する。なお、「満州」は「満洲」とも記すが、ここでは「満州」に統一したい。

- 2 孟悦・戴錦華『浮出歴史地表』（河南人民出版社1989年7月）および劉禾「文本，批評与民族国家文学：『生死場』的啓示」（『今天』1992年第1期，後に「文本，批評与民族国家文学」と題され，劉禾『語際書写——現代思想史写作批判綱要』香港天地圖書有限公司1997年所収）などを参照。
- 3 韓護「『第二代』論」（『大同報・文芸』1940年12月，『東北文学研究史料』1984年6月第9輯，所収）。
- 4 「ト内門」会社の全称は「ト内門洋碱有限公司」であり，1900年イギリスト内門公司（Brunner, Mond & Co. Ltd.）の子会社として上海に設立された。「道勝」銀行の全称は「華俄道勝銀行長春支行」であり，1900年に設立された。「正金」銀行の全称は「横浜正金銀行長春支店」であり，1907年長春に事務室が設立され，1919年事務室は長春支店となった。「道勝」銀行と「正金」銀行について，金広鳳主編『長春市誌・金融誌』，吉林文史出版社1993年2月第1版第1刷を参照。
- 5 釜屋修の「梅娘——その半生・覚え書き」（『季刊中国』No.36，1994年3月春季号）は梅娘の生年月日について次のように書いている。

農曆一九二〇年十一月十三日，猴年生まれ（二十三日かもしれないが，養母が届けたのは十三日だという。『万年曆』で換算すれば西曆一九二〇年十二月二十二日または一九二一年一月一日で酉年となる）。(p.68)
- 6 梅娘「我没看見過娘的笑臉」（「私は母の笑顔を見たことがない」），『婦女雜誌』1944年第5巻第11期，p.10。
- 7 梅娘「我的青少年時期（1920—1938）」，『作家』（長春）1996年第9期，p.59。
- 8 梅娘「長春憶旧」，『梅娘小説散文集』北京出版社1997年9月，p.591—592。
- 9 王承礼主編『中国東北淪陷十四年史綱要』，中国大百科全書出版社1991年9月，p.10。
- 10 中国第二歴史档案馆「日本並吞滿蒙之秘密計画」，『史政局及戦史編纂委員会档案』787巻，p.317。王承礼主編『中国東北淪陷十四年史綱要』，中国大百科全書出版社1991年9月より再引用，p.14。
- 11 袁犀，本名は郝維廉であり，郝赫，郝慶松，郝子健ともいう。筆名には瑪金，吳明世，梁稻，李無双，馬双翼，李克異などがある。

- 12 「李克異年譜」, 李士非ほか編『李克異研究資料』, 広州花城出版社1991年5月, p.5 参照。
- 13 梁山丁「我与東北的郷土文学」, 馮為群・王建中・李春燕・李樹権編『東北淪陥時期文学国際学術研討会論文集』, 瀋陽出版社1992年6月, p.365。
- 14 梅娘「我的青少年時期(1920—1938)」, 『作家』(長春)1996年第9期, p.59。
- 15 梅娘「我的青少年時期(1920—1938)」, 『作家』(長春)1996年第9期, p.60。
- 16 冰心『寄小讀者』, 上海北新書局1926年5月初版。
- 17 王承礼主編『中国東北淪陥十四年史綱要』, 中国大百科全書出版社1991年9月, p.223。
- 18 林紓(1852—1924), 字は琴南。作家, 文学研究者および近代西欧文学の翻訳家。
- 19 梅娘「我的青少年時期(1920—1938)」, 『作家』(長春)1996年第9期, p.63—64。
- 20 梅娘「蟹」, 『蟹』中華民国33年11月華北作家協會編集・武徳報社発行, p.107。
- 21 蕭紅・蕭軍『跋涉』, 哈爾濱五画印刷社1933年10月。黒龍江省文学芸術研究所1979年10月復刻。
- 22 梅娘「寒夜的一縷微光——『小姐集』刊行52年, 祭宋星五先生兼作選集後記」, 『梅娘小説散文集』北京出版社1997年9月を参照。
- 23 林里「東北女性文学十四年史」, 『東北文学研究史料』(1987年11月第5輯, 哈爾濱文学院)より引用, p.102。
- 24 徐迺翔・黄万華『中国抗戰時期淪陥区文学史』, 福建教育出版社1995年7月, p.61および50。
- 25 徐迺翔・黄万華『中国抗戰時期淪陥区文学史』, 福建教育出版社1995年7月, p.50を参照。
- 26 梅娘が筆者宛ての手紙(1993年9月18日)による。なお、『第二代』の中の(「傍晚的喜劇」)(「夕方の喜劇」)は幸い梅娘の手元に残っていて(原稿か掲載されたものと同か否かは未確認), 1992年長春の『小説月刊』第1期に再び掲載され, 後に1997年9月北京出版社より出版された『梅娘小説散文集』に収められている。
- 27 王秋蚩「我所知道的東北淪陥時期瀋陽文学——在東北淪陥時期文学学術討論会上的發言」, 『東北文学研究史料』1987年12月第6輯, 哈爾濱文学院, p.21。
- 28 『盛京時報』, 中国字新聞, 1906年10月18日日本人中島真雄が奉天で創刊。口語と文学革命を提唱。その先導の下, 「満州」各地の新聞もほとんど口語を採用

するようになったという。

- 29 徐迺翔・黄万華『中国抗戦時期淪陷区文学史』, 福建教育出版社1995年7月, p.115。
- 30 村田裕子「一満州文人の軌跡—穆儒丐と『盛京時報』文芸欄」(『東方学報』(京都) 1989年3月第61冊) 又は「穆儒丐の精神歷程」(馮為群・王建中・李春燕・李樹樞編『東北淪陷時期文学国際学術研討会論文集』, 瀋陽出版社1992年6月) などを参照。
- 31 王秋蚩「我所知道的東北淪陷時期瀋陽文学——在東北淪陷時期文学学術討論会上的發言」, 『東北文学研究史料』1987年12月第6輯, 哈爾濱文学院, p.26
- 32 王秋蚩「我所知道的東北淪陷時期瀋陽文学——在東北淪陷時期文学学術討論会上的發言」, 『東北文学研究史料』1987年12月第6輯, 哈爾濱文学院, p.33。
- 33 呂欽文「東北淪陷区的外来文学及其影響」, 『学術研究叢刊』1986年2月を参照。
- 34 張貴「東北淪陷期の新聞事業」(滝谷由香訳・丸山昇閲), 日本社会文学会=編『植民地と文学』, オリジン出版センター1993年5月, p.188—189。
- 35 川村湊『異郷の昭和文学——「満州」と近代日本——』, 岩波書店1990年10月, p.18。
- 36 梅娘「我的青少年時期(1920—1938)」, 『作家』(長春) 1996年第9期, p.60。
- 37 東方印書館は1937年に廃業, 『鳳凰』も同時に廃刊している。
- 38 王秋蚩「我所知道的東北淪陷時期瀋陽文学——在東北淪陷時期文学学術討論会上的發言」, 『東北文学研究史料』1987年12月第6輯, 哈爾濱文学院, p.40。
- 39 張毓茂「『東北現代文学大系』総序」, 『当代作家評論』瀋陽1997年6月, p.30。
- 40 「満州」文壇の質はともかくもそれなりの繁栄ぶりは次の文章からも窺えよう。

「品物を知らないことは恐くない, 品物を比べることが恐い」。もしわれわれは今日の「満州」の文芸に注目してから, 謙虚に自分[華北文壇]の品物を観察したら, 恥ずかしくなるしかなかろう。(馬不烈「文場新臉譜」, 『華文毎日』1943年4月第10巻第8期, p.19。
- 41 王秋蚩「文選刊行緣起」, 『文選』1938年12月。
- 42 盛英「梅娘と她的小説」, 劉小沁編集『南玲北梅——四十年代最受讀者喜愛的作家作品選』, 海天出版社1993年3月, 所収, p.361。
- 43 楊義「東北淪陷区小説」, 『東北文学研究史料』1987年12月第6輯, 哈爾濱文学院, p.6。

- 44 梁山丁「東北郷土文学の主張とその特徴」, 日本社会文学会=編『植民地と文学』, オリジン出版センター1993年5月, p.156。
- 45 王秋蚩「小工車」, 短編小説集『小工車』奉天文選刊行会1941年9月所収。
- 46 「李克異年譜」, 李士非ほか編『李克異研究資料』, 花城出版社1991年5月広州第1版第1刷, p.20。
- 47 袁犀の「十天」と「母与女」について, 以下のような評論がある。
 この二つの物語はあまりにも偶然的すぎる。作者は「悪人」に報復を受けさせ, しかも侮辱され迫害された人々が皆反抗をする。どんな形式を用い, どんな結果を得たにせよ, 我々にはそれは「機械的」でありすぎと思われる。こうして形式主義者になり, すべてが一定の形式に陥る。自分の理想に迎合するため幻想した物語は, 偶然の出来合が多すぎて, いたるところに嘘が見え, 活力も失ってしまった。「十天」と「母与女」の失敗は, 作者が抽象的な概念をうまく具現化していないからである。
 (上官箏「袁犀論」, 『中国文芸』1943年11月第9巻第3期, p.4)
- 48 袁犀「一只眼齐宗和他的朋友」『文韻』, 奉天文選刊行会1940年10月10日。
- 49 「李克異年譜」, 李士非ほか編『李克異研究資料』, 花城出版社1991年5月広州第1版第1刷, p.17。
- 50 袁犀「流」(後に「風雪」と改名), 『新青年』(奉天)1939年3—8月連載。
- 51 梁山丁の長編小説『緑色の谷』(『緑なす谷』)は最初に1940年5月—1941年『大同報・夕刊』に連載, 大内隆雄による日本語訳は『哈爾濱日々新聞』に連載。1943年3月新京文化社より単行本を出版。
- 52 逢増玉「東北淪陥期郷土文学与中国現代文学史上郷土文学之比較」および張毓茂, 閻志宏「論東北淪陥時期小説」, 馮為群・王建中・李春燕・李樹權編『東北淪陥時期文学国際學術研討会論文集』, 瀋陽出版社1992年6月, p.73および11。
- 53 梁山丁「東北郷土文学の主張とその特徴」, 日本社会文学会=編『植民地と文学』, オリジン出版センター1993年5月, p.157。
- 54 古丁「自序」(1938年2月作), 『奮飛』月刊満州社1938年5月。李春燕編『古丁作品選』, 瀋陽春風文芸出版社1995年6月, p.154。
- 55 爵青の中編小説『欧陽家の人們』(『欧陽家の人々』), 1940年新京益智書店が「学芸刊行会」の名で刊行した『学芸』(李文湘主編)の創刊号に掲載。1941年12月同名の小説集は新京芸文書房より出版。
- 56 岡田英樹「『満州国』の中国人作家——古丁」, 岩波講座『近代日本と植民地

- 7・文化の中の植民地], 岩波書店1993年1月, p.262。また, 浦三千代「作家古丁の経歴紹介」『中国文芸研究会報』1987年2月第64号および岡田英樹「古丁転向問題始末」『中国文芸研究会報』1987年7月第68号を参照。
- 57 古丁「自序」(1938年2月作), 『奮飛』月刊満州社1938年5月。李春燕編『古丁作品選』, 瀋陽春風文芸出版社1995年6月, p.153。
- 58 古丁の長編小説『平沙』, 『芸文誌』1939年第2輯。1940年日滿文化協会より出版。1940年8月は大内隆雄に日本語に訳され中央公論社より出版。
- 59 「余計者」はもともとロシア文学に現れた19世紀の知識人像を指すことばである。「余計者」を描いたツルゲーネフの『余計者の日記』や『ルージン』, レールモントフの『現代の英雄』ら代表作は中国近代の文学青年によく知られている。
- 60 Leo Ou-fan Lee. "The Romantic Generation of Modern Chinese Writers." Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1973. p.250。
- 61 紀綱「面従腹背—古丁」, 『中華日報』(台湾)1981年10月21日などを参照。
- 62 北村謙次郎『北辺慕情記』, 大学書房1960年9月, p.133—134。
- 63 岡田英樹「『満州国』の中国人作家—古丁」, 岩波講座『近代日本と植民地7・文化の中の植民地』, 岩波書店1993年1月, p.272。
- 64 古丁「自序」(1938年2月作), 『奮飛』月刊満州社1938年5月。李春燕編『古丁作品選』, 瀋陽春風文芸出版社1995年6月, p.155。
- 65 尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』, 近草書房1971年6月第1刷, p.120—121。当の本には, また, 『芸文誌』派作家の王則が日本文化人の「満州視察」を皮肉ったことを記録している。王則:「やって来ては, 茶菓子も取る。会談をやる。会談の内容は言葉が通ぜぬため一人二人の外国語をあやつる者が満州文学の近況といったものをノベルだけで, あとは『視察』を行った作家が先輩らしく感想を述べ指示する。そして『歡を尽くして散会』する」。(p.110)
- 66 Gunn, Edward M. "Unwelcome Muse: Chinese Literature in Shanghai and Peking 1937—1945." Columbia University Press, 1980. p.6。
- 67 古丁「譚三 夢境」, 『譚』, 新京芸文書房1941年11月初版。李春燕編『古丁作品選』, 瀋陽春風文芸出版社1995年6月所収, p.107—108。
- 68 古丁「一知半解随抄」, 『一知半解集』, 新京満州月刊社1938年7月初版。李春燕編『古丁作品選』, 瀋陽春風文芸出版社1995年6月所収, p.35。
- 69 古丁「譚三 夢境」, 『譚』, 新京芸文書房1941年11月初版。李春燕編『古丁作品選』, 瀋陽春風文芸出版社1995年6月所収, p.108。

- 70 古丁「譚五 通宵」,『譚』,新京芸文書房1941年11月初版。李春燕編『古丁作品選』,瀋陽春風文芸出版社1995年6月所収, p.134。
- 71 梁山丁「東北郷土文学の主張とその特徴」,日本社会文学会=編『植民地と文学』,オリジン出版センター1993年5月, p.154。
- 72 李春燕「就東北淪陥時期文学的幾個問題評古丁」,李春燕編『古丁作品選』,瀋陽春風文芸出版社1995年6月所収, p.616。
- 73 袁犀「隣三人」,長春月刊誌『明明』1937年第3巻第1期。
- 74 袁犀「母与女」,長春月刊誌『明明』1937年第3巻第3期。
- 75 陳因編集の『満州作家論集』(大連実業印書館1943年6月初版)には女性作家について梅娘と呉瑛二人の作品しか論じていない。
- 76 阿茨(李景慈の筆名)「跋」,梅娘『魚』北京新民印書館1943年6月所収。
- 77 山丁(梁山丁)「關於梅娘的創作」,『華文大阪毎日』第5巻第10期(1940年11月15日) p.41。
- 78 梅娘「侏儒」,『魚』北京新民印書館1943年6月所収。
- 79 上官纓「我所知道的梅娘」(長春)『作家』1996年第9期, p.70。
- 80 徐迺翔・黄万華『中国抗戦時期淪陥区文学史』,福建教育出版社1995年7月, p.284。
- 81 呉瑛(1915—1961,吉林市生まれ)「文学の栄溷 序にかえて」,『現代満州女流作家短篇選集』(大内隆雄訳)女性満州社(大連)昭和19年3月,所収。
- 82 呉瑛「給亜細亜的女作家」,『華文毎日』1944年2月第12巻第2期, p.11。
- 83 田琳について,閻純徳「破損の小舟,揚起希望の風帆——記田琳」,『作家的足跡』,知識出版社1983年10月を参照。
- 84 但娣「安荻和馬華」,『華文大阪毎日』1941年第6巻第1期および第2期に連載。後に小説詩文集『安荻和馬華』の収められ,新京開明図書公司より1943年(?)出版。
- 85 徐迺翔・黄万華『中国抗戦時期淪陥区文学史』,福建教育出版社1995年7月, p.48を参照。具体未詳。『斯民』廃刊後,満州雑誌社に移し,名を変え,1941年6月『麒麟』として創刊。小松,遲疑らが編集。
- 86 李柯炬・朱媿「1942至1945年東北文芸界一窺」,馮為群・王建中・李春燕・李樹權編『東北淪陥時期文学国際学術研討会論文集』,瀋陽出版社1992年6月, p.408。
- 87 尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』,近草書房1971年6月第1刷, p.107。
- 88 『満州浪漫』,日本浪漫派の流れを汲む文芸同人誌,1938年創刊,主宰者は北

- 村謙次郎。同誌について尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』（近草書房1971年6月第1刷，p.104）は、『満州浪漫』の創刊は「[建国精神]をスローガンにした」「新京イデオロギーに対する軽い反逆を意味したのかもしれない」と述べている。
- 89 川村湊『異郷の昭和文学——「満州」と近代日本——』，岩波書店1990年10月，p.19。
- 90 布野栄一「日本プロレタリア文学が描いた「満州」』，日本社会文学会=編『植民地と文学』，オリジン出版センター1993年5月，p.255—256。
- 91 北村謙次郎の回想。尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』，近草書房1971年6月第1刷，p.103。
- 92 北村謙次郎『北辺慕情記』，大学書房1960年9月，p.51。
- 93 檀一雄『青春放浪』，築摩書房，昭和31年4月。
- 94 日本近代文学館編『日本近代文学大事典』，講談社1984年10月，p.934。
- 95 川村湊『異郷の昭和文学——「満州」と近代日本——』，岩波書店1990年10月，p.115。
- 96 古丁『平沙』，1940年1月満日文化協会初版。李春燕編『古丁作品選』，瀋陽春風文芸出版社1995年6月所収，p.444。
- 97 岡田英樹「翻訳者・大内隆雄のジレンマ」、『朱夏』1993年12月第6号，p.55，59。
- 98 張貴「東北淪陷期の新聞事業」，日本社会文学会=編『植民地と文学』，オリジン出版センター1993年5月，p.188。
- 99 武藤富男『私と満州国』，文芸春秋1988年9月，p.334。
- 100 武藤富男『私と満州国』，文芸春秋1988年9月，p.336—338。
- 101 「事務機構合理化」のための政府行政機構の改革で、「他の官庁の仕事であって、弘報宣伝に何らかの関係をもつものは、あげてこれを弘報処に取り込むこととなった」。武藤富男『私と満州国』，文芸春秋1988年9月，p.332。
- 102 武藤富男『私と満州国』，文芸春秋1988年9月，p.333。
- 103 「芸文指導要綱」には五項目がある。一。趣旨。二。我国芸文ノ特質。三。芸文団体組織ノ確立。四。芸文活動ノ促進。五。芸文教育及研究機関。
- 104 尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』，近草書房1971年6月，p.130。
- 105 梁山丁「東北郷土文学の主張とその特徴」，日本社会文学会=編『植民地と文学』，オリジン出版センター1993年5月，p.155。
- 106 吳瑛『鳴』，『青年文化』康德10年10月。

- 107 但娣『戒』、『青年文化』康德10年10月。
- 108 岡田英樹「『満州国』首都警察の文芸界偵諜活動報告」、『立命館言語文化研究』1994年9月, p.138—139。
- 109 穆儒丐の長編歴史小説『福昭創業記』, 新京満日文化協会1939年6月初版。
- 110 陶明浚(1894—1960)の『紅樓夢別本』, 清代曹雪芹の『紅樓夢』を書き直したもので, 全120回ある。1937年ハルビン『大北新報』の副刊に連載。後に単行本を出したが, 出版社は未詳。
- 111 古丁の長編小説『平沙』, 新京満日文化協会1940年11月初版。
- 112 川村湊『異郷の昭和文学——「満州」と近代日本——』, 岩波書店1990年10月, p.149。
- 113 王秋蚩「我所知道的東北淪陥時期瀋陽文学——在東北淪陥時期文学学術討論会上的發言」, 『東北文学研究史料』1987年12月第6輯, 哈爾濱文学院, p.33。
- 114 呂元明「東北淪陥区における抗日思想文化闘争」, 日本社会文学会=編『植民地と文学』, オリジン出版センター1993年5月, p.146。
- 115 梁山丁「我与東北的郷土文学」, 馮為群・王建中・李春燕・李樹権編『東北淪陥時期文学国際学術研討会論文集』, 瀋陽出版社1992年6月, p.369。
- 116 これについて, 岡田英樹の「黒い挽歌を歌いつぐ人——『満州文学』の一側面」(『野草』1988年8月42号)が詳しい。
- 117 王秋蚩「我所知道的東北淪陥時期瀋陽文学——在東北淪陥時期文学学術討論会上的發言」, 『東北文学研究史料』1987年12月第6輯, 哈爾濱文学院, p.41。
- 118 「筆名箋注」, 李士非ほか編『李克異研究資料』, 花城出版社1991年5月広州第1版第1刷, p.484。
- 119 「李克異年譜」(李士非ほか編『李克異研究資料』, 花城出版社1991年5月広州第1版第1刷)によると, 1937年, 芸文高等中学校で勉強していた袁犀は小説を書く練習を勤勉にしていた。時に巴金が北平の三座門大街に住んでいるのを知り, 巴金を訪問しようとした。何回も門まで行く勇氣しか持たなく, 帰ったが, 最後の一回は訪問を実現した。
- 120 「李克異年譜」(李士非ほか編『李克異研究資料』, 花城出版社1991年5月広州第1版第1刷)による。
- 121 梁山丁「我与東北的郷土文学」, 馮為群・王建中・李春燕・李樹権編『東北淪陥時期文学国際学術研討会論文集』, 瀋陽出版社1992年6月, p.373。
- 122 『華文大阪毎日』, 1938年11月1日に創刊, 1943年1月第10巻第1期第101号より『華文毎日』と改題, 1945年5月廃刊。最初は半月刊, 1944年から月刊誌

に変わる。平川清風主宰。

- 123 李柯炬・朱媿「1942至1945年東北文芸界一窺」，馮為群・王建中・李春燕・李樹權編『東北淪陷時期文学国際學術研討会論文集』，瀋陽出版社1992年6月，p.407。
- 124 梅娘「我的青少年時期（1920—1938）」，『作家』（長春）1996年第9期，p.67。
- 125 梅娘が筆者宛ての手紙（1998年7月18日）による。